

成功する経営者がめざす七つの要件

エル教育企画 飯島宗広

「成功する経営者の要件」なるものは様々あるかと思いますが、私なりの意見を述べます。参考になれば幸いです。

一. 強い「使命感」を持たねばならない。

「企業の使命」にも「社会的使命」、「経済的使命」、「永続的使命」の3つの使命があるように、経営者にも各々使命感があるはずです。何のために経営しているのか、誰のために会社を繁栄するのか。夢やロマンもあるはずです。そのためには、綿々と続く創業の精神や経営者の普遍的な「理念」が無ければならないでしょう。

技術が変わろうが、経済状況が変わろうが、震災や争いがあるろうが、人が求めている「平和」や「幸福」、「豊かさ」や「繁栄」などに対するの壮大な使命や理念、哲学が経営者には必要でしょう。揺るぎない「使命感」が、その根底になければならないのです。

歴代の偉大な経営者は、確固たる「哲学」を持っていました。松下幸之助然り、本田宗一郎、豊田佐吉、井深大、彼らは戦後の日本の復興を願い、日本国民に希望を与えた経営者でありました。あなたは、強い「使命感」を持っているでしょうか。

二. 正しい「教育者」でなければならない。

人の多くは、仕事を通じて成長、発展するものです。企業の繁栄が個人や国家を豊かにしていることは、もはや疑う余地はないでしょう。しかし、本当の豊かさは経済的繁栄だけではありません。「心の豊かさ」「精神的成長」「社会的健康」の教育が求められています。学校教育や家庭教育にはもはや期待できません。人生の半分を費やす場所としての企業が、その任を負わなければならない時代です。それも企業の使命になるでしょう。「読み」「書き」「そろばん」、「礼儀」から、企業はあらゆる教育の場になっています。経営者はモノを作る前に、「人」を作らなければならないといわれます。タナベ経営の創業者、田辺昇一氏は「経営は人間創造の芸術だ」。土屋ホームの土屋公三氏は「経営の中心は教育だ」は、至言であると思います。あなたは教育者という自覚はあるでしょうか。

三. 孤島的「忍耐力」を持たねばならない。

企業経営は、経営者が思っているようにはなかなか進みません。企業経営は我慢の連続でしょう。

安岡正篤氏は、「四耐」が経営者に必要とといいます。「四耐」とは、「冷」に耐え、「苦」に耐え、「煩」に耐え、「閑」に耐えること。経営者は、孤独に耐え、迷い悩み逆境に耐え、煩わしさに耐え、地位や名誉を失ったとしても、耐えなければならない。そういう「覚悟」が無ければならないとといいます。ユニチャームの高橋慶一郎氏は「右手にロマン、左手にソロバン、背中に我慢」は有名な言葉です。あなたは、忍耐力と覚悟はあるでしょうか。

四. 革新的「戦略家」でなければならない。

あらゆる企業の共通の「経営の目的」は、「お客様の創造と維持」であります。屋台のラーメン屋からトヨタ、アップルに至るまでここから目を離したら倒産します。この経営の目的を達成するためには、「戦略」が必要です。

「戦略」を簡単にいうと、「何を売るのか」「誰に売るのか」「どうやって売るのか」「どう管理するのか」を考えることです。

「戦略」は机上の論理だけでは立てられません。「現状の把握」が出来、「指導育成」やそれぞれの「管理」が出来ていないと立てられません。経営者がどこまで組織を把握しているかが問われます。あなたは「戦略家」として会社の全てを把握しているでしょうか。

五. 楽天的「演出家」でなければならない。

企業には様々な人がいます。それぞれの個性や得意分野もあります。それらの人達を、適材適所で効率よく発揮できるようにしなければならないでしょう。また、企業は苦しみのある場であってはなりません。「成長の場」であり、「生きがいの場」であり、お互いの「苦楽を共にする場」、「共有、共感できる場」でなければなりません。そのためには、経営者自らがエンターティメント的演出をしなければならないでしょう。ある意味で「楽道家」が求められますし、娯楽性や遊び心も必要でしょう。社員の個性や長所、短所を活かした職場を作ることには急務です。あなたは楽しい「演出家」でしょうか。

六. 手堅い「実務家」でなければならない。

誰が言い出したか分かりませんが、「企業経営は博打だ」という人がいます。「博打」であってはなりません。博打に付き合わされる社員はたまったものではありません。確かに、不確実な部分は多くありますが、「博打」ではありません。

経営者は、手堅い実務家としての要素が求められます。「手堅さ」が必要です。計数に強くなければなりません。計数に弱ければ「判断」が遅れますし、「決断」が出来ません。経済観念に弱ければ、経営者には向きません。「三現主義(現実・現場・現金)」も重要な経営の要素です。あなたは「手堅い実務家」でしょうか。

七. 英知的「感性」が高くなければならない。

「強い使命感」も「教育者としての信念」も「忍耐力」も「戦略」も、机上の論理では出てきません。現場で働く人たちに無関心では出来ません。それらは、自分をとことん見つめ、感性を磨くことから湧き上がるものです。そのためには、経営者はいつも「内省」する時間が必要です。自分一人の時間を作り、自分自身を第三者の目を見て、「邪推」「邪心」「思い込み」などが無いかをチェックする必要があります。「反省」する時間が必要です。そうすることによって「研ぎ澄まされた感性」が磨かれます。「研ぎ澄まされた感性」とは、目に見えないものを「感じ取る力」です。この「感性」は先見力となり、また、人の心が読めるようになります。

自分を常にニュートラルに置くことで、正しい判断ができるようになります。あなたは「感性」を磨いているでしょうか。

がんばれ「経営者」!

上記のような「要件」をすべて兼ね備えている経営者は失礼ながら、なかなか少ないと思います。自分に欠けているものを、努力して身に付けることは必要です。また、自分に欠けているものを身に付けている人を部下に置くことも必要でしょう。やりようはいくらでもあります。

最近、資本家や経営者に対する風当たりは強いように思うことがあります。「働き方改革」もそのうちのひとつと思います。「働くな」と言っているように聞こえるのは筆者だけでしょうか。確かに一部の経営者やリーダーの中には、「過労死」や「長時間労働」「ひどいパワハラ」を助長したり放置したりして、社会問題になっています。しかし、それはごく一部のはずです。多くの経営者は、社員や取引先を大事にして、自らの身代を抵当に入れ、社員と一緒に汗を流している経営者です。

そういう経営者が報われる世の中が理想です。しかし、40年以上前の労働組合的発想の社会主義的政治家や、世の中の不幸を喜ぶマスコミの影響で、経営者が大きな発想や大胆な戦略が出来ない雰囲気になってきています。また、最近では、さらに、中国発新型コロナウイルスにより、日本中が、マスコミや政治家の影響により、「恐怖症」という大きな「病」に犯されています。また、政府のバラマキ政策の影響が、この先「大増税」を生むのは間違いありません。これからの日本経済界は、リーマンショックの数十倍の大不況になる見込みにあります。今までの経営を大きく見直す時期でもあります。今こそ、経営者の真価が問われます。

この機会を大きな転機として、高い「使命感」を持ち、「社員を教育」しながら、「忍耐力」を維持し、「革新的戦略」を立て、「楽観的に行動」し、しかも「手堅く」実務をこなし、人の痛みを知る「感性高い」経営者を目指しましょう。がんばれ「経営者」!